

水稲の倒伏等により収穫が困難な場合の対応について

令和8年10月 栃木県農政部経営技術課

長雨・大雨等により倒伏が発生し収穫が困難な場合の対策

- まず、排水路・水尻・暗渠等を点検し、ほ場をできるだけ乾かして地耐力を確保します。
- 未収穫稲をすき込む場合は、土壌還元（硫化水素による障害等）対策、翌年の施肥量の見直し、漏生イネ対策をセットで行います。

1 排水対策の徹底

倒伏した稲や湿ったほ場を乾かし、トラクター等の作業機が安全に入れる状態を確保します。排水路の詰まりを除去し、暗渠栓の開放、水尻の排水確保、必要に応じたほ場内の溝切り等により、速やかな排水に努めます。

土壌が軟弱な状態で無理に大型機械を入れると、深いわだちや土壌の練り返しを生じ、翌年の作業にも影響します。ほ場の乾き具合を確認してから作業してください。

2 未収穫稲の細断と秋すき込み

ほ場内で作業ができるようになったら、できるだけ早く未収穫稲の処理を行いましょう。気温の高い秋のうちに作業することで、未収穫稲の分解を促進できます。

大型作業機が走行できる程度まで土壌が乾き、わだちがでにくい状態になってから、フレールモア等を用いて未収穫稲をできるだけ細かく裁断します。

細断後は、ロータリー等で早めに秋すき込みを行い、稲わらと土壌を十分に混和して腐熟を促進します。作業深や速度は、土壌条件、残さ量、使用機械に応じて無理のない設定とします。

腐熟促進を目的として石灰窒素等を使用した場合は、翌年の施肥量に影響するため、資材の成分量を確認し、次作の施肥設計に反映してください。

3 すき込み後の土壌還元対策

稲わらや籾の分解が不十分なまま入水すると、土壌還元が強まり、ガス（硫化水素）の発生や根の活力低下が生じることがあります。秋のうちに分解を進め、翌年はほ場の状態を観察しながら水管理を行います。

ガスの発生が著しい場合は、地域の栽培指針や指導機関の助言を踏まえ、中干しや間断かん水等により根圏環境の改善を図ってください。

4 次年度の施肥量を検討

籾ごと未収穫稲をすき込んだほ場では、有機物から供給される養分を考慮し、土壌条件、生育状況、使用した腐熟促進資材等を踏まえて基肥窒素量を検討します。倒伏を防止するため、若干施用量を減らしてください。

5 漏生イネ対策

未収穫稲をすき込んだほ場では、翌年に漏生イネが発生する可能性があります。基本的には前年と同じ品種を作付し、異品種混入を防止します。やむを得ない理由で前年と異なる品種を作付けする場合は、異品種混入を防ぐため、発生状況を早期に確認し、抜き取り等を徹底します。

除草剤による対策は、栽培方法、ほ場条件、対象雑草、登録内容によって使用できる薬剤・時期が異なります。必ず最新の農業登録内容とラベルを確認し、農業振興事務所・JA等に相談のうえ適正に使用してください。

参考：農研機構「雑草イネ・漏生イネ防除技術マニュアル」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/129066.html

6 農作業安全

軟弱なほ場、傾斜部、水路際での農業機械作業は転倒・転落等の危険が高まります。無理な作業は避け、機械の詰まり除去・点検はエンジンを停止してから行います。単独作業を避けるなど、事故防止を最優先してください。

9～11月は「秋の農作業安全確認運動」の実施期間です

- ・安全キャブ・フレームのある機種を使用する、または後付けする
- ・シートベルトとヘルメットを着用する
- ・日没前の作業終了と一般道走行に備えて灯火器類の装着、点検をする
- ・わら詰まり等の解消はエンジンを止めてから行う
- ・機械作業者と補助作業者間で、双方向の安全確認を行う

